夕霧の元服と光源氏
——光源氏と夕霧を切り離す力——

中井　賢一

'Genpuku' or Historical Japanese Coming-of-age Ceremony for 'Yugiri', and 'Hikaru-genji' : A Dynamics to Separate 'Hikaru-genji' and 'Yugiri'

Kenichi NAKAI

要旨　夕霧の元服に関わって、光源氏の「配慮」と見えた処遇は、夕霧を光源氏と対照的な地位に切り離す要因として機能する。夕霧は、元服の時点で、光源氏の後継者にはなりえない対峙的存在として既にかたどられてあった。

はじめに

夕霧を三条邸で元服させた後、初任叙位を六位に留め、更には大学寮に入れるという光源氏の処遇については、先行研究においても「教育を重視する」姿勢(1)といった類の捉えられ方をすることが多い。光源氏の「反常識」の姿勢(2)と断じる御見解も一部あるが、概ね、一連の光源氏の処遇については、政治的にも教育的にも夕霧に対する配慮ゆえのものと好意的に捉えられることが一般的と言えよう。

私も、もとよりそのような「政治的」「教育的」効果を否定するものではない。しかし、果たしてこの一連の処遇を支えるものは、そういった光源氏の「好意的」な「配慮」ばかりなのであろうか。光源氏の内実に、『好意的』な『配慮』以外の思惑が見え隠れしてはいないか。そして、そのことは、光源氏と夕霧との関係を位置付け固定する重要な意義を担っているのではないか。

本稿においては、夕霧元服にかかる一連の光源氏の処遇のありかたについて、その表現を読み辿ることで、光源氏の夕霧に対する姿勢の特徴について明らかにし、それがこの物語における人物造型や人間関係の設定にいかに立ち働いているか考察することとする。

一　夕霧を二条院で元服させられない光源氏

大殿腹の若君（夕霧）の御元服のこと（光源氏は）おぼしいそぐを、二条の院にてとおぼせど、大宮のいとゆかしげにおぼしたるもことはりに心ぐるしければ、なをやがてかの殿（三条邸）にてせさせたてまつり給。右大将（頭中将）をはじめきこえて、御をぢの殿ばら、みな上達部のやむごとなき御おぼえことにてのみものし給へば、あるじ方にも、我もくと、さるべきことどもはとりぐに仕うまつり給。

（少女巻二八〇頁）(3)

二〇一〇年十一月三〇日（受理）

宇部工業高等専門学校一般科准教授

傍線部、光源氏は夕霧の元服を二条院でしようと思ったが三条邸で行った、と記されている。元服が成人の儀に相当し、貴族にとって、政治社会への新たな参加を言挙げする意味を持つ以上、父光源氏としては、夕霧が光源氏と同閥と喧伝できるのだから、本来なら「父の邸、二条の院であるべき」(4)なのは言うまでもない。おそらく、光源氏としても、世間が夕霧を光源氏の後継者と見てくれるのだから、自身の政治力の拡大を訴えることもでき、政治的メリットも大きかったはずである。だからこそ、当初光源氏は「二条の院にてとおぼ」したに違いない。光源氏は、本心では、夕霧の元服は是非とも二条院で行いたかったのだ。

にもかかわらず、光源氏は夕霧を三条邸で元服させる。これは夕霧のバックに光源氏が控えていると言挙げする機会をみすみす失うことでもあり、更に言うなら、夕霧の親の立場を占めるのは、むしろ光源氏ではなく左大臣一族であると宣伝するに等しく、光源氏にとって大きな政治的損失とも言えなくはない。一体なぜ光源氏は三条邸での元服を認めたのであろうか。

本文には、波線部「大宮のいとゆかしげにおぼしたるもことはりに心ぐるしければ」とあり、夕霧の祖母大宮の強い意向が働いていたことが窺える。「いとゆかしげ」とあるとおり、大宮の願望は光源氏にありありと見て取れるほど滲み出ていたわけである。この大宮の意向について、藤本勝義氏は、「大宮自身も、皇女であると同時に権門の北の方としての性格を兼ね備えていた。(―中略―)夕霧の元服を(光源氏は)二条院でとり行おうとしたが、大宮の心情を汲んで、源氏はそのまま故太政大臣(引用者注：左大臣のこと。本稿では、以降「左大臣」の呼称で統一する。)邸でさせるのである。この夕霧が六位にされると真っ先に不満を感じたのも大宮である。これは、単に孫かわいさからだけでなく、左大臣家に嫁してその繁栄を期する、皇女でありながら権門の北の方になりきった女性の発想と捉えうる」と言われた(5)。大宮が、権門の北の方として、左大臣家の政治的繁栄を夕霧との繋がりを通じて目論んでいる点を析出されたのであるが、それは同時に、大宮が、夕霧を光源氏の子息というより左大臣家の一族として捉えていたということをも意味しよう。つまり、大宮は、夕霧を自家の子息同様に考えていたがゆえに、光源氏に対して自らの意向を強く表明していたと考えられるのである。

ただ、光源氏にとって問題だったのは、このような考え方が、ひとり大宮のみに限ったものではなく、当の夕霧においても同様だったという点である。田中隆昭氏が、大学入学後も何かと三条邸を訪れては大宮に愚痴をこぼす夕霧と、それに同調する大宮の言動から、「二人に共通して、亡くなった左大臣の一族であるという意識が強い」と指摘される(6)とおり、夕霧と左大臣家とは強い同族意識によって結ばれていたようだ。顕著な例を引用しよう。

「…六位など人の侮り侍めれば、しばしのこととは思ふたまふれど、内へまいるも物うくてなん。故おとゞ(左大臣)おはしまさましかば、戯れにても人には侮られ侍らざらまし。(光源氏は)もの隔てぬ親におはすれど、いとけゝしうさし放ちておぼいたれば、おはしますあたりに、たやすくもまいりなれ侍らず。…」

(少女巻三一六頁)

夕霧は、自分が「六位」だからと「人の侮り侍」るので参内も気乗りがしない、という。傍線部「故おとゞおはしまさましかば、戯れにても人には侮られ侍らざらまし」とあることから、この「六位」ゆえの「侮り」も、左大臣が存命なら無かったはずだ、と考えていることが知られる。傍線部直後に、光源氏に対する夕霧の批判的言辞があるが、この「六位」叙位を決定した張本人がその光源氏であることを思い合わせると、夕霧としては、左大臣が存命なら、自分が「六位」にされることはなかったはずだ、光源氏もそこまではしなかったはずだ、とこの叙任に不満を募らせていたのだろうと推察される。無論、たとえ「六位」であっても左大臣存命ならその威光で「侮り」が無くなると夕霧が考えていたとも読めなくはない。が、しかし、いずれにせよ重要なのは、夕霧が、自分の地位に対する「人」の評価が、光源氏でなく左大臣の存在によって左右されると捉えている点である。広瀬唯二氏は、「祖父にあたる太政大臣(左大臣)が存命であったならば、と考える夕霧には、幾分他者への依存心はあるものの、父親としての源氏に依存する意識が希薄になっていると言える」、「父親に頼れない、救済を求めることができない状況であることは、夕霧にも確固として認識されている」と、光源氏に対して心理的に一線を画し、光源氏との繋がりを期待しない夕霧のありようについて指摘された(7)。元服当時、既に夕霧は、光源氏との連繋を期待していない。そして、むしろ、左大臣一族との連繋をこそ期待している。夕霧にとって光源氏は、点線部「いとけゝしうさし放ちて」とあるように、文字通り、距離のある存在であったことになろう。

翻って、光源氏としても、左大臣家に出入りするうち、当然そのような夕霧の自分に対する視線を感じ取っていたであろう。夕霧が、実父たる光源氏よりも、はるかに左大臣一族に信頼を寄せていること、大宮も夕霧を「自家の子息」と見なしていること、そして、夕霧と左大臣家の人々が「同調」していることを知っていたがゆえに、光源氏は、夕霧を強引に二条院で元服させることをためらわずにはいられなかったのではないか。

元服の場として三条邸が選択された理由として、安随直子氏は、「夕霧と

藤原氏とのつながりをも確認して、もしもの場合彼が藤原氏の後援をも受けられる可能性を残しておくため」と、政治的意図の観点から説いておられ(8)、説得力がある。無論、そのような政治的効果は発生したであろうし、光源氏もそれは期待していただろう。だからこそ、光源氏も大宮らの意向に沿うように元服の場を変更したに違いない。しかし、おそらくこのとき、それが光源氏にとっての狙い、いわば最優先事項というわけではなかったはずである。前にも述べたが、光源氏は、まず夕霧を二条院で元服させようと計画していたのである。「藤原氏の後援」が第一義的な「狙い」であるなら、大宮らの意向に思いを巡らせることなく、ましてや、そもそも二条院での開催を想定することもなく、初めから迷わず三条邸での主催を計画したであろう。

つまり、光源氏が、二条院開催という、自身のそもそもの計画を抑え、夕霧元服の場として三条邸を容認せざるを得ないのは、従来言われてきた「政治的」意図のみならず、夕霧を、光源氏とでなく左大臣一族との連繋者として捉える大宮の、そしてそれと「同調」する夕霧自身の、いずれも強い思いに、光源氏が慮らざるをえないから、なのである。即ち、光源氏は、夕霧を二条院で元服させられないのである。

二　夕霧を四位にさせられない光源氏

さて、ここまで光源氏と夕霧の関係が、左大臣家と夕霧のそれより、「距離」が置かれている点について見てきた。では、なぜ光源氏と夕霧は、「距離」を描かれねばならないのか。例えば、光源氏には夕霧から一方的に疎まれねばならない必然性があるのか。あるいはその逆か。それとも他の要因が関係するのか。

直ちに確認したいところであるが、敢えて、ここでしばらく光源氏のもう一人の男児、冷泉と光源氏との関わり方を一瞥しておかなければならない。夕霧に対するそれとの比較、対照のためである。

上（冷泉）は、夢のやうにいみじき事を聞かせ給て、色〳〵におぼし乱れさせ給。故院の御ためもうしろめたく、おとゞ（光源氏）のかくたゞ人にて世に仕へ給も、あはれにかたじけなかりける事、かたぐ〳〵おぼし悩みて、日たくるまで（冷泉が）出でさせ給はねば、かくなむと聞き給て、おとゞ（光源氏）もおどろきてまいり給へるを御覧ずるにつけても、いとゞ忍びがたくおぼしめされて、御涙のこぼれさせ給ぬるを、おほかた故宮（藤壺）の御事を干る世なくおぼしめしたるころなればなめり、と（光源氏は）見たてまつり給。その日、式部卿の親王亡せ給ぬるよし奏するに、いよ〳〵世中のさはがしき事を（冷泉は）嘆きおぼしたり。かゝるころなれば、おとゞ（光源氏）は里にもえまかで給はで、つとさぶらひ給ふ。

（薄雲巻二三五～二三六頁）

光源氏が実父だったことを知り、思い悩む冷泉を描く場面である。傍線部、冷泉が「日たくるまで出でさせ給は」ないことを知った光源氏は「おどろきてまいり給へる」とあり、また、冷泉が「世中のさはがしきこと」をも「嘆きおぼし」ていると察した光源氏は「里にもえまかで給はで、つとさぶらひ給ふ」とある。執務どころではない冷泉の様子を看取した上で、即座に行動を起こした光源氏の姿に、冷泉をよく支えている優秀な摂政としての能力が現れているのは無論ではあるが、果たして、ここの表現から読みとれるのは、光源氏のそのようなありかただけだろうか。

光源氏は冷泉を慮って「里にもえまかで給はで」とある。自邸に退出しようと思っても退出できなくなってしまうのだ。冷泉の嘆く姿を目にしたとき、光源氏は居ても立ってもいられなくなるのだ。この「退出できない」という光源氏のありかたには、冷泉の嘆きに心打たれ、心配でたまらない光源氏の内実が見て取れるようである。だからこそ、太傍線部、放っておけず「つと」寄り添うようにそばにいずにはいられないのだろう。ここには、如才ない摂政としての姿を超えた内実が籠められているように思われないか。政治的な繋がりを超えた光源氏の冷泉に対する思いやりが籠められているように思われないか。

確かに、点線部のように、冷泉の嘆きを「おほかた故宮（藤壺）の御事を干る世なくおぼしめしたるころなればなめり」と見たのは光源氏の錯誤ではあった。しかし、私は、光源氏が冷泉の嘆きの原因が即藤壺のことである、と判断してしまうことの、意味の深さをこそ思う。

そもそも、藤壺の死を誰にも増して悲しんでいたのは光源氏自身であったろう。「御念誦堂に籠りゐ給て、日一日泣き暮らし給」（薄雲巻二三二頁）とあり、誰にも吐露することのできない悲しみをひとりで噛みしめる光源氏の胸の震えまでが伝わってくるようである。この時の光源氏は、自らの嘆きの原因が藤壺にあったように、冷泉の嘆きの原因もそれであると即座に措定している。あたかも自分と冷泉とが同じ視座を構えているかのごとく判断しているのである。これは、光源氏が、冷泉も藤壺を追悼するという自分と共通のコードを有している、と見ていることを意味する。のみならず、何よりもそのコードに優先的に支配されているはず、と思い込んでいることをも意味する。おそらく、それは藤壺が光源氏と冷泉にとって最も近しい私的関係性

にあり、またそれが秘さざるを得ない関係性であるという冷泉との共通項が、光源氏をしてさように思わしめるのであろう。無論、それは二人が藤壺を介した父子関係にあることに拠るものである。光源氏は、冷泉に対する父性に根差し、その対象として冷泉を見ているからこそ、そのように即断してしまうのではなかろうか。光源氏が、冷泉の嘆きの原因として、全くほかの要素に考えを及ぼさないことは注目して良い。光源氏は、「父性」を冷泉に振り向け、「里にもえまかで給はで、つとさぶらひ給ふ」という行為にそれを韜晦、潜在化させているのである。光源氏のこのような冷泉に対するありかたを確認しておこう。

では、ここで夕霧に立ち戻ろう。前節では元服についての記事を取り上げたが、それに引き続いて記される夕霧叙位の記事を引用する。

四位になしてんとおぼし、世人もさぞあらんと思へるを、まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからんも中〳〵目馴れたることなり、と（六位に）おぼしとゞめつ。

（少女巻二八一頁）

光源氏は、夕霧の初任叙位について、一旦は四位に付けることも考えたが、結局六位に留める。その意図については、例えば、佐貫新造氏によって「少なくとも父光るの思いやりに発するものであり、今後の昇進の妨げになるどころか、却ってそれを容易にするものであった」[9]と、夕霧への「思いやり」ゆえと説かれたり、あるいは、三田村雅子氏によって「みずから努力して出世することを夕霧に課す光源氏の教育は、『甘え』を許さない、冷たいものである。」[10]と、「『甘え』を許さない」がゆえと説かれたり、まさに光源氏の心性において、硬軟両様に解釈されている。両氏とも、結果的に夕霧が「昇進」「出世」という政治的栄達を手にするための光源氏の配慮、いわば、夕霧のための教育的配慮という見方では共通しておられるし、また、このような見方は一般化していると言えよう。

しかし、私には、ここに光源氏のそのような意図が第一義として籠められているとは到底納得しがたいのである。私は、光源氏が夕霧に対して「教育的」でない、と言っているのではない。光源氏が「教育的」理論を有しているのは、直後にある大宮とのやりとり（少女巻二八一～二八二頁）からも分かるし、そこにはかなりの真実もあろう。光源氏の弁明を聞いた大宮も納得させられたとおり、世間の人々も多く光源氏の「教育的」な「配慮」と理解したに違いない。しかし、この夕霧の一件については、それ以外にも光源氏の特異な目論見が横たわっているように思われてならないのである。

傍線部のとおり、光源氏は、夕霧が四位に叙任されることを「中〳〵目馴れたることなり」と嫌い、それゆえに六位に留めるという。まずは、このような光源氏の動機に注目したい。『岩波古語辞典補訂版』によると「目馴れ」は「世間に多くあって、よく目に入る」あるいは「いつも見ていて、何とも感じなくなる」の意とされる。ここで、念のため『源氏物語』中に光源氏視点で用いられているとおぼしい「目馴れ」の用例を確認しておくことにする。一般的な語義というよりも、あくまで光源氏その人の把握の仕方、いわば光源氏の個人言語としての「目馴れ」の意味を措定しておきたいと思うからである。少女巻に極力近く、かつ明らかに光源氏の視点に即していると思われる用例を二つ挙げてみる。

a　（光源氏）「女五の宮のなやましくしたまふなるを、とぶらひきこえになむ」とて、ついゐ給へれど、（紫上は）見もやり給はず。若君（明石姫君）をもてあそび紛はしおはする側目のたゞならぬを、「あやしく御けしきの変はれるべきころかな。罪もなしや。塩焼衣のあまり目馴れ、見立てなくおぼさるゝにやとて、とだえをくを、またいかゞ」など（光源氏は）聞こえ給へば、…

（朝顔巻二六〇頁）

b　（光源氏）「よろづの草子、歌枕、よくあなひ知り、見尽くして、その中の言葉を取り出づるに、よみつきたる筋こそ強うは変はらざるべけれ。常陸の親王の書きをき給へりける、紙屋紙の草子をこそ見よ、とておこせたりしか。和歌の髄脳いとところせう、病さるべき所多かりしかば、もとよりをくれたる方の、いとゞなか〳〵動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。よくあなひ知り給へる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」とて、（光源氏が）おかしくおぼいたるさまぞ（末摘花には）いとをしきや。

（玉鬘巻三七〇～三七一頁）

aは、光源氏が朝顔斎院に執心し、それを不快に思う紫上に対する光源氏の口実である。『河海抄』によると、「須磨の海女の塩焼衣なれゆけばうとくのみこそなりまさりけれ」を引歌とする。そうであるとすると、「須磨の海女」に「なれ」た、つまり見馴れたことによって「うとく」なっていくという歌意からも明らかなように、ここは新潮『集成』本や、岩波『新大系』本の解釈どおり「見馴れすぎて」で良いであろう。bは、新年の衣配りの後、末摘花の返礼としての唐衣歌について、紫上と批評しあう光源氏の言葉である。「よくあなひ知り給へる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」は、言うまでもなく末摘花を揶揄する言い口であり、従って、ここも『集成』本や

『新大系』本の「ありふれた歌ですね」という解釈で妥当であろう。

見たとおり、明らかに、光源氏は「目馴れ」を、「見馴れすぎ」た「ありふれた」事物についての評言として把握し、また用いているようだ。つまり、「中〳〵目馴れたることなり」というのは、光源氏が夕霧を処遇するのに、四位叙位はあまりに一般的だ、ということ、つまり四位叙位が、光源氏ならではの目を引く処置ではなく、かえってありふれていてつまらない、という光源氏の内実を投影する表現であったのだ。

注意したいのは、光源氏が、何よりも先ず、世人を驚かせるような斬新な自分の処置そのものについて演出したがっていた、という事実である。これは、夕霧がそのような光源氏の目論見のために利用されているということではないのか。極論するなら、光源氏は、六位叙位を「夕霧のため」ではなく、むしろ光源氏自身のために執り行った、ということになりはしないか。つまり、光源氏にとっては、光源氏自身の画期的処遇を世に喧伝するという目論見を内包した六位叙任だったのであり、「教育的」な「配慮」などはあくまで主たる目的にはなり得なかったのである。いわば、「夕霧のため」の「教育的」な「配慮」は、体の良い口実ともなりかねないような脆弱さを内包していたのである。

夕霧に対するこのような光源氏のありかたは、他にも見え隠れしている。例えば、六位を苦にする夕霧の心情を代弁する大宮に対して、「いとおよすげてもうらみ侍ななりな。いとはかなしや、この人のほどよ」、「学問などして、すこしものの心得侍らば、そのうらみはをのづからとけ侍なん」（少女巻二八三頁）と、相手にもしない。切実な訴えを、あたかも切り捨てるがごとく一笑に付し、そして、全ての非を夕霧の「ほど」、つまり幼さに帰して、真正面から夕霧や大宮の疑問に答えようとしない光源氏の姿に、十全たる「教育的」な「配慮」の意志を見て取ることができようか。ここの光源氏の姿勢が、誠実で真摯なそれとは程遠いことを感じ取るのは、おそらく私だけではないだろう。

高橋信敬氏は、光源氏が夕霧に当初「四位」叙位を考えたという事実と、またそれを容認する「世人」の考え方を、当時の二世源氏に関する叙位の史実に照らし合わせた上で、「歴史の現実から大きく乖離し、物語にきわめて不自然な展開をもたらす」、「現実にはありえない夕霧の四位が物語では当然のことのような書かれているのは何故か」と疑義を呈され、「源氏が夕霧を六位にすることは思いも及ばぬとして『世人』が普通に考えるとすれば、親王の子でない以上四位はあり得ず、また四位直叙は必ずしも有利な官途を意味しないから、当然五位からの船出、それも一二才の早い出発であり、順風満帆またたく間に議政官へたどり着く、と言うことになろう。したがって『四位になしてむ』とは、五位は元服に随伴する必然的な条件だから言わずもがな、すぐにでもそこから四位に上げてしまう謂ではあるまいか」[11]と説かれた。これは、従来の、光源氏をあたかも親王と同レベルと見なすことでその高い存在性を指摘する立場[12]や、律令を様々な要素から解釈する可能性を見出す読者を想定する立場[13]等を否定する御見解であり、より自然な本文解釈になった感はある。ただし、「五位は元服に随伴する必然的な条件だから言わずもがな、すぐにでもそこから四位に上げてしま」おうという光源氏の意志についてはまだ納得できるにしても、その場合、「世人もさぞあらんと思へるを」が自然な解釈になると言えるのか、疑わしい。「世人も」、光源氏が夕霧をひとまず従五位下に叙した上で「すぐにでもそこから四位に上げてしまう」つもりでいるのだ、と、光源氏の段階的な計画まで理解していた、とは考えにくいのではないか。ここはやはり、光源氏も夕霧を当初は四位に叙そうと考え、また「世人も」光源氏が夕霧を四位に叙するだろうと予想していた、という字面どおりの解釈で良いと思われる。

そうなると、注目すべきは、やはり史実を越えてまで、二世源氏夕霧を、そもそも四位に即けようと考えた光源氏の内実のありようなのではないか。「世人」が「さぞあらん」と考えていた理由もこの一点に収束するように思うのである。

先にも見たとおり、光源氏は、夕霧の元服を、光源氏自身のアピールの場とも見なしていたとおぼしい。いかに「世人」の目を引きつけ、光源氏の威光いまだ衰えざることを言挙げするかに腐心していたとも考えられる。つまり、「四位になしてん」という当初の案は、「歴史の現実に大きく乖離」しているがゆえに、光源氏の卓越した政治力や他の誰にも備わらない超越性を世に効果的に知らしめることが可能だったのであり、もとより光源氏としては自らの目論見に適ったものではあったのである。そして、「世人も」、光源氏ならば史実を無視して夕霧を四位にするという強引な方法でその稀代の権力者ぶりを見せつけるだろう、と予測していたのだ。世の政治家がなりふり構わず権力を志向していることも、光源氏が政治に対して剛腕を発揮していることも、広く「世人」の知るところだったということになろう。だからこそ光源氏は、「まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからんも中〳〵目馴れたることなり、とおぼしとゞめつ」と、「目馴れ」ないことを主眼に、「世人」の予測を逆手に取るべく、自分の政治的権力にものをいわせた力任せの四位叙位などは行わず、「教育的」な「配慮」が働いたと見える六位叙位という、いわば光源氏の人間的な厚みを演出できるような、それでいて「世人」が予測もつかないような、権力志向のそれとは全く逆の措置を講じた、ということなのではないのか。権勢の中枢にいる

内大臣が自らの子息を「実際上貴族社会の最下位」(14)といわれる六位に叙するという処遇は、その落差ゆえにショッキングで、人目を惹くことこの上なかろう。四位叙位以上に、印象的かつ効果的な、光源氏自身の自己アピールの方法として、夕霧の六位叙位は選び抜かれたものであったと思うのである。政治的剛腕を見せつけるのではなく、むしろ政治性から遠い処遇によって、光源氏は自らの健在ぶりを喧伝しようとしていたと言えよう。

このような光源氏の夕霧に対するありかたに、前に触れた、冷泉の処遇に関わってほの見えた「父性」を、同様に看取することは困難といって良いだろう。光源氏は、どうあっても夕霧を四位にさせられなかった。四位に就けるわけにはいかなかったのである。夕霧の六位叙任は、「夕霧のため」でなく、光源氏自身のために、「権勢の中枢」にある光源氏が、その対極「貴族社会の最下位」に夕霧を追い遣った、文字通り、光源氏の「冷たい」処遇だったのであり、その意味で、極めて意図的な「反常識」の行為だったと言わざるを得ないだろう。

三　光源氏と夕霧を切り離す力

その後、光源氏は夕霧に漢学を学ばせるべく大学入学を課す。その深意としては、光源氏自身が、前節にも触れた大宮への弁明の中で述べているが、玉上琢彌氏は、『やまとだましひ』政治的判断、適当な処置だけではだめである。（―中略―）漢籍の知識があれば、ふと聖賢の教えが頭にひらめき、明王の治績が口の端に出る。それがあって政治的判断が場あたりの、たして二で割るのではないことになる」(15)と、その政治的効用を光源氏の「弁明」に沿う形で早くに指摘され、夕霧を本当の実力の伴った政治家として育成したいという光源氏の「教育的」な「配慮」を高く評価された。しかし、一方で、藤原克己氏が、「摂関制下の、理念の欠落した〝現実的〟才覚が、そして学問よりも〝有職〟が重んじられるような大和魂的政治運営のありかたや、権勢に阿付する世相などに対する透徹した思念にもとづく警世言、と解し受け止めざるを得ない」(16)と、光源氏の、当時の摂関体制へ警鐘を鳴らそうとする意図を説かれたり、倉田実氏が、「嫡子入学は、大学寮振興の喧伝になり、内大臣源氏の最後の施策として政治のありようを理念的実際的に指示し、冷泉帝聖代を演出していよう」(17)と言われたり、光源氏その人の「施策」の一環と位置付ける見方もある。高橋亨氏が、この時代の政治状況と史実に照らした上で、「それ（漢学を行うこと）じたいはすでに時代錯誤（アナクロニズム）というほかない一面をもっていたし、光源氏の〈王権〉幻想に組みこまれた〈政権〉の現実化というべき機能にすぎなかった」(18)とも断じておられるように、そもそも漢学を修めること自体が、夕霧にとって実質上の政治的効果を生むものであったか疑わしいのも事実であり、大学で漢学を学ばせることが、この時代、既に「時代錯誤」であった以上、「夕霧のため」というより、光源氏のため、逆に夕霧が狂言回し的役割を課せられた、とも思えてくる。思えば、先に挙げた藤原氏の御見解も、光源氏の政治理念の開陳のため夕霧の大学入学が利用された、と言い換えることが可能であろうし、また倉田氏の御見解にしても、光源氏が自らの政治手腕を「世人」に見せつけるべく夕霧は利用された、とも読み替えられる。これは、まさに前に見た六位叙位と同様、光源氏が、「夕霧のため」でなく、光源氏自身のため夕霧を利用している、と見るべきではないのか。冷泉に対して窺えた「父性」あふれるありかたと似ても似つかない「冷たい」スタンスと見るべきではないのか。

夕霧元服の二年近く前、明石姫君と夕霧を比較する光源氏の心中は次のように記される。

> 大殿腹の君（夕霧）を、うつくしげなりと世人もてさはぐは、猶時世によれば、人の見なすなりけり、かくこそは、すぐれたる人の山口はしるかりけれと、（明石姫君が）うち笑みたる顔の何心なきが愛敬づきにほひたるを、（光源氏は）いみじうらうたしとおぼす。（松風巻二〇〇頁）

「世人」の夕霧に対する高い評価を、光源氏は、夕霧その人の能力と見ず、「時の権勢に追従するので世人はそのように見ようとするのであった」(19)と切り捨てる。光源氏の言う「時の権勢」とは、まさしく光源氏自身の力の謂であろう。夕霧本人を評価せず、夕霧を通じて、まず光源氏自身の権力を確認するという光源氏のありようは注目に値する。確かに、身内ゆえに夕霧を辛目に採点したとも考えられよう。あるいは、この時、光源氏にとっては明石姫君と初の対面であり、その感激ゆえ、姫君以外の人物を相対的に貶めさせているとも考えられなくはない。しかし、そういった場面性を差し引いてみても、波線部、明石姫君を夕霧と比較して「かくこそは、すぐれたる人の山口はしるかりけれ」と絶賛する光源氏の内実からは、明らかに、光源氏が夕霧を「すぐれたる人」とは見なしてはいなかった、という事実が知られる。光源氏の、夕霧に対する「『冷たい』スタンス」が、少なくとも元服以前から長期に亘って継続していることが窺えるのである。

例えば、現代的な一般論ではあるが、親子の関係にあって、親の子に対する「『冷たい』スタンス」を、子が主導的に誘発するとは考えにくく、夕霧が光源氏に距離を置こうとするがゆえに光源氏の夕霧に対する「『冷たい』

スタンス」が固まった、とは思えない。つまり、あくまで光源氏にこそ主因があるのではないか。今井源衛氏は、夕霧の、光源氏に距離を置く姿勢を、光源氏を「他者」と見なす視線、と定位された上で、「しかし、父親を他者と見るようにしむけたのは、むしろ源氏のほうなのである」[20]と、光源氏が、この「冷たい」関係性を主導してあることを見て取っておられる。

当然、夕霧は物心つく頃から周囲の人間を観察し、中でも大宮を中心とした三条邸の人々の愛情を強く感じていたであろう。だからこそ「左大臣の一族」といった「同族意識」が芽生えたのだろう。母葵上がいないことでかえって左大臣家の人々の愛情が増し、それを夕霧が看取することで、より一層その繋がりは堅固になったのだろうと思われる。しかし、逆に、実父たる光源氏については、自分に対する何か「冷たい」姿勢も夕霧は感じ取っていたのではなかったか。光源氏の、心の懸隔のようなものを折に触れ看取していたのではなかったか。多く母方の家で育てられるという当時の養育形態を鑑みるに、夕霧と光源氏が直接顔を合わせる機会は、決して多くはなかったであろう。そもそも会う機会が少なかったのに、そのわずかな機会のうちに夕霧に「『冷たい』姿勢」を感じさせてしまう光源氏のありようは注目に値しよう。

おそらく、そのような光源氏のありようには、夕霧に振り向ける「父性」の薄さ、別の言い方をするなら、冷泉に振り向ける「父性」の厚さ、ひいては藤壺への情愛の深さが関わっているのだとは想像されるところである。

しかし、ここでは最早、そのような光源氏の心の内部を掘り下げたり、動機の真相を探ったりすることは目的ではない。無論、夕霧の内実を精査することも目的ではない。

ここまでの検証から私が問題にしたいのは、光源氏の「配慮」と見えたことが、その契機において光源氏の夕霧に対する「『冷たい』スタンス」を反映したものであり、そして、おそらくそれを早々と看取していたであろう夕霧が、それに呼応するかのごとく、光源氏から「距離」を置くという事実なのである。言い換えるならば、光源氏が「父」としての「配慮」を喧伝することが、逆に光源氏と夕霧との位置を「冷たい」関係として切り離し遠ざける要因となっているという事実なのである。

光源氏の「配慮」と措定される夕霧に対する処遇が、夕霧を光源氏の後継であり得なくさせ、結果、逆に光源氏と、いわば対照的、対峙的な位置へと遠ざけてしまう。言い換えるならば、光源氏の「配慮」は、光源氏と夕霧を、「対照的」、「対峙的」な地平へと切り離す、極めて逆説的な力として働いているのだ。

塚原明弘氏は、光源氏が、五節の舞姫の後宮選納を黙認するという、摂関家的権力専横のセオリーに反する態度を取ることと、夕霧への六位叙位を関わらせつつ、「蔭位制によって認められていた権利を放棄していた」と纏められた[21]が、まさに光源氏は、光源氏の子息として夕霧にあり得た「政治的」な「権利」を「放棄」することになったと言えよう。

そうあってみれば、我々が、夕霧を三条邸で元服させたり、また、六位に就けたりする光源氏の処遇に見通さなければならないのは、「父性」ゆえの「政治的」あるいは「教育的」な「配慮」ではなく、光源氏と夕霧との「対照的」、「対峙的」関係なのではないか。実の親子でありながら、決して相容れることのない、両者の特殊な関係性なのではないか。「王朝社会の一員としての正式なデビュー」[22]である元服の時、夕霧は、既に「父」光源氏と切り離されてあった。夕霧と光源氏との、「対照的」、「対峙的」関係[23]は、既に物語内部に必然化されてあったのである。

おわりに

光源氏の「政治的」な、あるいは「教育的」な「配慮」として定位されることの多い夕霧の元服、六位叙任であるが、光源氏の内実にそのような意図が少なからずあったにせよ、それは決して第一義ではなく、光源氏の、「夕霧を二条院で元服させられない」、そして、「夕霧を四位にさせられない」内的事情に拠っているものであることは忘れてはならない。光源氏の「『冷たい』スタンス」に立脚したものであることは忘れてはならない。

また、それは、夕霧が光源氏の後継たり得ないこと、そして、むしろ夕霧が、後継どころか、逆に光源氏と「対照的」、「対峙的」な位置に据えられる人物であることを示す徴表ともなっている。逆説的にふたりの関係性を決定するものとして働いている。内大臣という「権勢の中枢」にある光源氏が、「貴族社会の最下位」六位に夕霧を追い遣るという事実も、ふたりが「対照的」、「対峙的」な関係としてあることを示唆する象徴的表現と見るべきなのかも知れない。

夕霧の元服が二条院で行われないこと、そして、四位叙任が叶わないことは、この物語において、既に光源氏と夕霧とが、「対照的」、「対峙的」な関係として造型されていることを示す顕著な徴表だったと言えるであろう。

注

（1）目加田さくを氏「源氏物語の人間」（『源氏物語を読む　梅光女学院大学公開講座論集』第25集　笠間書院　平成元年9月）

（2）佐貫新造氏「『乙女』における光る源氏とその周辺」（『源氏物語の状況的人間像』翰林書房　平成9年10月）
（3）引用の源氏物語本文及び頁数は、岩波書店『新日本古典文学大系源氏物語』に拠る。なお、『新大系』本の底本は大島本であり、それを欠く浮舟巻のみ明融本である。
（4）玉上琢彌氏『源氏物語評釈』角川書店　昭和40年
（5）藤本勝義氏「源氏物語における大宮をめぐって―準拠と造型―」（『研究講座源氏物語の視界1』新典社　平成6年4月）
（6）田中隆昭氏「夕霧物語の主題」（『源氏物語研究集成』第二巻　風間書房　平成11年9月）
（7）広瀬唯二氏「母性と光源氏像―源氏物語における親と子―」（『源氏物語の探求』第十三輯　風間書房　昭和63年7月）
（8）安随直子氏「夕霧像の再検討―六条院の内と外―その二」（「國語國文」第六十一巻第七号　平成4年7月）
（9）（2）に同じ
（10）三田村雅子氏「虚構の家」（『源氏物語―物語空間を読む』ちくま新書　平成9年1月）
（11）高田信敬氏「夕霧元服―少女巻箋注―」（「研究と教養　むらさき」第三五輯　平成10年12月）
（12）吉森佳奈子氏「『河海抄』の光源氏」（「國語國文」第六十五巻第二号　平成8年2月）
（13）菊池真氏「『源氏物語』「少女巻」における夕霧の初任叙位」（「国文学研究」第百二十集　平成8年10月）
（14）野口元大氏「夕霧元服と光源氏の教育観」（『講座源氏物語の世界』第五集　有斐閣　昭和56年8月）
（15）（4）に同じ
（16）藤原克己氏「幼な恋と学問―少女巻―」（『源氏物語講座3』勉誠社　平成4年5月）
（17）倉田実氏「少女　源氏物語五十四帖をよむ」（『新・源氏物語必携』学燈社　平成9年9月）
（18）高橋亨氏「可能態の物語の構造―六条院物語の反世界」（『源氏物語の対位法』東京大学出版会　昭和57年5月）
（19）『新大系』本脚注
（20）今井源衛氏「親と子」（『源氏物語の思念』笠間書院　昭和62年9月）
（21）塚原明弘氏「『少女』巻の五節―夕霧のかいま見をめぐって―」（『源氏物語と古代世界』新典社　平成9年10月）
（22）植田恭代氏「元服・裳着―源氏物語に見る成人儀礼」（『源氏物語研究集成』第十一巻　風間書房　平成14年3月）
（23）拙稿「夕霧〈不在〉の論理―夕霧の機能と物語の〈二層〉構造―」（「國語國文」第七十四巻第十号　平成17年10月）、「夕霧〈太政大臣予言〉の論理―〈夕霧権力体制〉の誤算と物語の〈二層〉構造―」（「國語國文」第七十六巻第六号　平成19年6月）、「『夜ごとに十五日づつ』通う夕霧―浮舟の機能と物語の〈二層〉構造―」（『古代中世文学論考』第二十集　新典社　平成19年10月）。
光源氏と対峙的関係にあるのは頭中将だと古来把捉されてきたが、これら一連の拙稿では、光源氏と真の対峙的〈一対〉の関係にあるのが夕霧であることを、権力機構生成の観点から明らかにしている。